内田魯庵全集

12

翻　　訳 I

ゆまに書房

内田魯庵全集　第十二巻

四八〇〇円

昭和五十九年四月二十日　初版

著　者　内田魯庵
編　者　野村　喬
発行者　荒井秀夫
印刷所　第二整版印刷所
製本所　古賀製本株式会社

発行所　ゆまに書房

東京都千代田区内神田一―五―十一　セントラル大手町
電話　（二九二）〇七九八
振替　東京四―六三一六〇

内田魯庵全集第十二巻／翻譯Ⅰ　目次

罪と罰卷之一……五
罪と罰卷之二……一五五
前卷批評……三四三
再版本はしがき……三八九
めを と……三九五
黒　猫……五〇九
黒頭巾……五二一
解　題……五三五
解　説……五六七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

翻

譯

I

罪と罰　卷之一

例　言

一本書の作者を Fedor Michailovitch Dostoieffsky と云ひ、今を去る十餘年前千八百八十一年二月十日モスコー府に歿す、「罪と罰」は實に其傑作也。

一余は魯文を解せざるを以て千八百八十六年板の英譯本（ヴ井ゼッテリィ社印行）より之を重譯す。疑はしき處は惣て友人長谷川辰之助氏に就て之を正しぬ。本書が幸に英譯本の誤謬を免かれし處多かるは一に是れ氏の力に關はるもの也。

一本書は一に原文に從ひ輕々しく字句の增減を爲すに躊躇せりと雖も西文の妙味は遽に我が文字に移植しがたきを以てまゝ前後を取捨せし處少きにあらず。識者若し甚だしく原意を損ずるを發見せば請ふ垂教せよ、余は刪潤を加ふるに吝ならざる也。

一魯西亞の語音は中々に日本の假名にて顯はしがたき者多し、人名地名等大方は其近きを擇びしのみ。識者之を咎むる勿れ。

一本書を擇するに當て第一に恥づるは余が魯文に盲なる一事にして識者の嗤笑も亦爰に在らむ。然れども

其嗤笑を顧みずして之を重譯するもの豈理由なしとせんや。幸に友人の魯文に通曉する者あツて其譯本の誤あるを正し足らざるを補ふて聊か其罪を輕ふするを得たるは余が實に感謝する處也。庶幾くは江湖の諸君子も「重譯」の言下に之を斥罵する事なからむ。

二十五年十月

譯者識

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

小説

罪と罰

上篇

第一回

七月上旬或る蒸暑き晩方の事。S……「ペレウーロク」（横町）の五階造りの家の、道具附の小坐敷から一少年が突進して、狐疑逡巡の體でK……橋の方へのツそり出掛けた。

首尾よく階子の下口で主婦に出會はなかッたが、此家の主婦は下坐敷に住ッて、臺所が常々戸の開いたまま階子に對て居るので、いつでも少年が出掛ける時は、餘義なく敵の竈前を通り過ぎ、骨身に染みるほどの恐怖を生じ、意久地なく眉に皺を寄せるが常であるといふは宿料の停滯があるから、それで顔を合はせるが怖ろしいのだ。

斯くばかり少年に畏氣が附いたは不幸が重ッた故でなく此頃中依剝昆垤里亞に均しき神經的沈鬱症に罹

ッたからだ。全く社會から隔絶れ、一室に籠ッて、單り此家の主婦のみならず、誰と顔を合はせるも嫌で〳〵たまらぬ。一度は貧に逼られた事もあッたが、今では此一點に感覺を失くして日々の業務を悉く拋擲してしまッた。で、いろ〳〵窘める算段を廻らす主婦や、高が下宿屋の主人が凝す様な工風を内心の内心では冷笑してゐたが、階子段に待伏せられて、長たらしい嫌味な辨舌に捲くり立てられ、催促、脅嚇、愚痴を聞いてもじ〳〵しながら謝言と托辭を並べるよりは——矢張何うにかして猫の如く見附からぬ様にこッそり縞み足で下りる方が好かッた。けれど此時街へ出ると此女性の債權者に遇ふを恐れる自身を怪んでゐた。

『是れンばかりの事に、なぜ慌てる——大事を目論んでゐながら』と考へて奇怪な笑を洩した。

『人は何事も我が手を以て爲すを得、唯薄志弱行で、曰はゞ意久地がなくて棄てゝ仕舞うのだ。で、人の一番恐ろしがるのは何かと云ふと——平生の習俗に反して一生面を開く事だと自己は想像する。一躰自己は理屈を云ひ過ぎる、から何もしないンだ。何もしないからツイ理屈が出るンかも知れない。日がな一日部屋の隅に轉ッて一生懸命に考へ込んだ。何を？　「ゴローフ」王の事を（「ゴローフ王」は我が桃太郎の如き稚物語也）。で、とう〳〵先月中から獨言を云ふ癖を附けッちまッた？』

『ちよッ！　何しに今時分出掛けたンだ——かの一件、あれが自己に出來るか？　第一眞面目に考へた事だらうか？　いや、こんな幻想を焔して自分で自分を慰めてるに過ぎない、唯ほんの玩弄だ！　さうだ！　玩弄かも知れない！』

町中の炎熱は蒸殺される様で、從來の雜踏、石灰、煉瓦、材木の鹽梅や、夏になッても別莊に行かれぬ聖彼得堡の住民には躾ぎ慣れた異樣な汚臭が既に激昂してゐる少年の神經を攪動した。殊に此所らには珍らしからぬ居酒屋から燻蒸する烟と、休暇でなくても何所にも蹣跚いてゐる醉倒人は此嘔吐を催すべき不快な舞臺を補ッて、我が主人公の呀えた顏色は忽ち苦々しき嫌惡の印象を露はした。

計らず氣を附けて見れば彼は人の注意を曳くに足る男で、背は普通より高く、すらりとして釣合の好い纖弱な質で、濃い鳶色の髮と美くしい黑色の眼は中々に際立ッて見える。

が、昏迷に陷ッてゐると云ふより、恰て心が痲痺れてゐる樣に、四邊に氣を附けずに、又氣を附けやうともしないで、唯折々自分で自分に二言三言呟いては、初めて是が自分の癖と爲ッたを知る樣である。

豁然として此時彼は悟ッた彼が思念は非常に攪亂されて益々薄弱に流れた事を。前二日間彼は殆ンど絕食してゐた。

身に纏ふた衣服は破れちぎれて、恐らく誰でも此襤褸を下げて白晝中出歩行く事は厭だらうと思はれる程だ。勿論此處は格別衣類の目に立たぬ所で、聖彼得堡の中心センナヤ卽ち草市場の近所は流石に職人の巢窟と云はるゝだけあッて、どンな猥雜な着裝をしても更に驚くに足らぬ。でなくとも酷烈なる少年の輕侮心は、極端なる神經質にも係らず、みすぼらしき襤褸を下げて平氣で市中を歩行く樣になッた。けれども面識ある人、取別け平生逃げ隱れてゐる舊友に邂逅ッた時は、必ず異樣な感じを起したかも知れぬ。

『ゐーイ！　獨乙帽子！』

突然一個の醉人が濁聲を上げたので彼は忽ち立止ッた。此言葉は何の仔細もなく車をがたくりさせて行く男から出たらしいが、氣が附いて帽子をかなぐり取ッて見ると、チンメルマンの店で買ッた山高帽で、被り古して、汚れきッて、班點だらけで、塵埃が積ッて、鐔が取れて、一と口に云へば頗る滲澹たる物であッた。が、一切外飾を斷裁ッた此被り主は耻かしいよりは寧ろ心配でならなかッた。

『自己も怪しいと思ッた』と心配さうに彼は呟いた『とウから自己も氣が附いてゐた、成程此帽子じゃ目立ッていかん、何でもこんな些細な事から物はばれッちまうンだから一ッ襤褸相應の「キャツプ」を見附けやう。どんな古物でもとんだ心配がなくて好い樣だ。こんな「ハツト」を誰が被ッてるもんか、一里離れてゐても忽ち人の目に附く、すぐ記臆へられッちまう、何の事アない詮義の蔓を準備して置く樣なもンだ。なるべく人目に立たん樣にとしてゐるのに、爰が大事だ、小事中々に輕んずべからず萬事悉く關係して居るからナ』

左程遠くまでは行かなかッた。が、彼は下宿から此端までの正確な距離を辨知した、――卽ち七百三十歩である。何うかした拍子で不斗此道程を數へたは恰も彼の隱謀が空漠たる夢の樣に頭腦に浮んだ時からで、彼自身にすら中々此時には實行出來やうとは思はれず、唯賤むべき、忌むべき、しかし又迷ひ易き狂想と妄念に調戯られたばかりである。然るに一ト月經つと異ッた方角から見はじめて、愚圖々々した意久地のない獨言で自身を叱責してゐたが、段々少しづゝ馴れて來ると、見す〳〵自身の決心を疑ひながらも、此所謂「賤むべき」妄想が何うやら實行出來る樣に考へた。現に彼は其目論見を繰返して苦惱は一歩

一歩毎に増して來た。

頓て一方は溝渠、一方は街衢に面した大きな建家の前へ來ると、少年の心は沈み返ッて其肢躰は慄へ出した。此大厦には凡そ各種の細民——裁縫職人、錠前鍛冶、料理番、賣淫婦、小官吏、獨乙人（魯西亞では甚だしく獨乙人を嫌ふ事米人が支那人に於ける樣である）等の下等人種が雜居して雲集蟻續常に二ッの門と二ッの戸口から出入してゐた。

此家に屬する番人（魯西亞語「ドボールニク」）は三四人も有ッたが、大幸福にも少年は此目を免れて逸早く右手の階子段に登ッた。狹くて、凄くて、且つ「眞暗」な階子段であるが、少年は既に馴染んでゐる樣であッた。又此昏然たる黑暗々は却て探偵の鷹目を避くるに都合が好く、少年の爲には寧ろ感謝すべき事であッた。

『斯う今からびくつひて何うする、豫ての計畫を實行する時に』と四階に登ッた途端に彼は考へた。

只見れば二三の兵卒上りの人足が家財を運んで階子の溜段を塞げてゐたは、同宿の獨乙官吏の一家が愈々引越すものらしく思はれた。

『しめた！　此獨乙人めが轉しちまやア、今度來る時、、、爰には、婆ア一人ッきりだ。しめた！　しめた！』と考へながら彼の老婦人の部屋の呼鈕を引いた。微かに低い音が響いたが是は銅といふよりは寧ろ錫の樣に思はれて、斯る種類の家では下等な下宿人の通例持てゐるものである。

今まで此音を忘れてゐた。が、ふッと此奇怪の音に氣が附くと、何事か思出したと見えて、忽然戰慄を

起した、——彼の神經は頗る懊弱である。

暫らくすると戸が少し開いて其隙間から部屋の主人が小さな眼を暗黑の中に燦つかせながら、慥に猜疑の心をもて訪問者を吟味すると、溜段の上には多勢人がゐたから、やッと安神したらしく戸を排放した。少年は薄暗い前房に入ッた。壁一ト重を距てゝ奥は狹い臺所であッた。其部屋の中に默然として屹立し不審しげにきッと少年を凝視めたは、年配六十位の皺枯れて癯せこけた老婆で、鼻準透ッて鋭く尖り、陰險な色を帶びた眼光はギラ〳〵人を射る樣である。胡麻色の前髪は塗膩でてかついて帽子を冠らず雞の足の樣に瘦せた細長い頸に「フランネル」の切布を卷付け、此溫氣にも拘らず汚れきッた羊羹色の毛皮の領卷を肩に掛け、絶えず咳嗽を咳いてゐた。が、忽ち疑念の色が其面貌に現はれたを見て、少年は不思議さうに老婦人を睇視めた。

『大學生ラスコーリニコフ、一ト月前に伺ひましたッけ』と忙いでちよいと腰を曲げて挨拶した。が其途端に最一層愉快に元氣らしくせねばならぬ事に氣が附いた。

『覺えてますよ、よウく覺えてますよ』依然疑はしさうに少年を凝視ながら老婦人は答へた。

『仝じ用で復た來ました』と輕く答へたが、其邪推深い眼でいつまでも睨まれて、何だか冷遇されるらしかッた。ラスコーリニコフは較や狼狽氣味で中々落付いてはゐられなかッた。が、無理遣に其不安心を押へ付けて斯う考へた、『なアに、是がいつもの癖だらう、是までついに氣が注かなかッたが』と。

暫し默然として老婦人は何か思案するらしかッたが、頓て奥の戸を指示して訪問者を案内した。『あち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c